OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出土文献を用いた古代中国思想史の再考
Author(s)	三輪, 大樹
Citation	平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54670
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

申請先学部　文学部
採択番号　　No.1

平成 27 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	みわ　だいき 三輪　大樹	学部 学科	文学部 人文学科	学年	2 年
ふりがな 共　同 研究者名	てい　しょうじ テイ　ショウジ	学部 学科	文学部 人文学科	学年	2 年
					年

アドバイザー教員 氏名	中村　未来	所属	文学部
研究課題名	新出土文献を用いた古代中国思想史の再考		
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。		

一、研究目的

本研究では、『清華大学蔵戦国竹簡』（以下『清華簡』）の第五分冊の中の「湯處於唐丘」の釈読を行い、古代中国における政治観の一端を明らかにしようとするものである。この文献では、古来賢臣とされてきた伊尹がテーマの中心に据えられており、また、“天”、“民”、“君”といった重要な政治概念が述べられており、中国古代の政治観を知る上で、大きな役割を果たすと考えられる。

二、研究計画・方法・経過

「湯處於唐丘」は、出版されたばかりであり、整理者の原釈文とわずかな先行研究があるのみである。そのため、本研究では、整理者の原釈文と原注、及び先行研究を参考にして、まずは釈文の確定を行った。その上で、伝世文献に見られる伊尹との比較検討を行い、本文献の性質を明らかにした。その上で、そこに見られる政治観は中国古代思想の上でどのような位置づけを与えることができるか、明らかにした。

尚、研究を進めるに当たって、新出土文献を精力的に研究している中国出土文献研究会、中国出土資料学会、漢字学研究会、といった各学会にも積極的に参加して情報収集を行い、新たな視点を盛り込めるように尽力した。

三、書誌情報

「湯處於唐丘」は、『清華簡』の第五分冊の一篇として出版された。全 19 簡あり、長さは約 44.4 ㎝、幅は約 0.6 ㎝、文字の欠損はない。篇題はなく、初めの 5 文字をとって篇題とする。

同じく『清華簡』第五分冊に収められた『湯在啻門』と形制や字迹が一致し、内容も近く、同一人物により書写されたものと見られる[1]。

四、研究成果

初めに釈文を確定し、訓読、現代語訳、及び注釈をつけ、それを元に以下の研究を行った[2]。

・成立年代

「湯處於湯丘」の正確な成立年代は不明であるものの、「如何」が「如台」と書かれていることから、春秋時代前期よりは後であると考えることが出来る[3]。福田氏は、『左傳』哀公元年の「昔の闔廬、食は味を二にせず」といった記述との内容面や叙述形式の類似から、「湯處於湯丘」は春秋戦国期の政治的気風を反映したものであるとする[4]。

・内容

「湯處於唐丘」は、三つの場面に分けることが出来る。

場面①では、湯と伊尹の出会いが描かれる。有莘氏から妻を娶った湯が、その妻の付き人である伊尹の料理に深く感動し、その料理のような調和を以て、彼と共に夏を討とうと計画する。

場面②では、病のため出仕できない伊尹を、湯が直々に訪問する様子が描かれる。方惟がこのことを聞いて湯を諫めるが、湯は自分が訪問することこそ、政治において実績のある伊尹に対する自分の当然の務めであると述べ、方惟は大いに感銘を受ける。

場面③では、湯と伊尹の政治についての問答が描かれる。

・伝世文献に見られる伊尹故事との関連

「湯處於唐丘」は、多くの点において伝世文献との深いつながりを見出すことが出来る。

場面①は、『呂氏春秋』の「本味」と関わりがある。「本味」では、伊尹の奇妙な出生譚に始まり、料理人に育てられ、有侁氏（「湯處於唐丘」の有莘氏に比定される）の妻の付き人となり、伊尹に仕えるに至る経緯が描かれており[5]、「湯處於唐丘」と大体の点で一致する。しかし、「本味」では、湯が伊尹を求めたのと同時に伊尹の方でも湯に仕えたいと考えているが、それに対して「湯處於唐丘」では伊尹の方から湯に仕えようとしたとは書かれていない。

伊尹が湯に仕えようと考えていたかどうかは、伝世文献によっても大きく分かれる点である。『孟子』「萬章章句上」では、万章に伊尹は湯に仕えようとしていたのかと問われた孟子はこ

---

1 『清華大學藏戰國竹簡（伍）』、134 頁。

2 これらの作業に当たっては、原注の他に、曹方向「清華簡《湯處於唐丘》所見伊尹"割烹"故事初探」及び「清華簡《湯處于湯丘》補論一則」、散宜凌「清華簡《湯處於湯丘》補說」、馬文增「清華簡《湯處于湯丘》新釋、注譯、析辯」、福田一也「清華簡『湯處於唐丘』釈読」を参考にした。尚、紙数の関係で、この報告書では釈文、訓読、現代語、及び注釈は割愛した。

3 子居は、「清华简《尹至》解析」の中で、「如何」は『商書』に見られることから、『尹至』の成立は春秋前期を遡ることはないとしている。

4 福田。

5 四部叢刊『呂氏春秋』巻十四「本味」、「有侁氏女子採桑･･･」。

れをきっぱりと否定し、湯の方が伊尹を得ようと幾度と無く伊尹を尋ねた結果、伊尹がこれに応じたのであると説く[6]。『史記』「殷本紀」では、「本味」と同様に伊尹の方から湯に味の調和を説いて取り入ったとしているが、別の説として孟子に見られるような湯が伊尹のもとを幾度となく訪ねたのであるという説も併記している[7]。

場面②では、『墨子』「貴義」に類似の故事が見える。「貴義」では、伊尹のもとに直々に訪れる湯を御者である彭氏の子が諫め、それに湯が答える様子が描かれている。湯は伊尹を、国難を救う“良医”や“良薬”に譬え、これを迎えることを喜ばない彭氏の子を強く叱責し、彼を解雇している[8]。この場面では、彭氏の子が解雇されたか、方惟が湯に感服したかという差はあるものの、問答の内容自体に大きな差はない。しかし場面②では湯が伊尹の見舞いに行くのに対し、「貴義」では伊尹を登用するために、訪ねようとしている。

以上のように、「湯處於湯丘」を含め、各文献で、伊尹から湯に仕えようとしたのか否か、湯が伊尹を幾度も訪ねたのは登用するためか見舞いのためか、という点をめぐり、異同がある。「湯處於湯丘」の記述は、それらの伊尹故事の原型を探る上で、示唆的である。これについては、伊尹故事の原型に湯が伊尹に直接見舞いに行ったという故事があり、そこから、伊尹が病気になった故事が抜け落ち、湯が伊尹を『墨子』に見られるように直接迎えようとした故事や、『孟子』のように何度も湯が伊尹を訪ね、伊尹が感動して湯に従ったという故事に、伊尹像が神格化されていったと考えることもできるのではないか。

・問答場面について

場面③で目立つのは“敬天”、“尊君”、“利民”といった政治観である。このような概念が顕著に見られるのは『荀子』で、「君道篇」で荀子は、君主を万民の根源であり、君主が民を愛さず、利益を施さずにおれば、民は君主や国家のために命を投げ出すことはないと説く[9]。

また、同用の考え方は、『管子』にも見られる。「正篇」では、民を愛し、生かして養い、彼らに利を与えてそれを自ら“徳”を施していると思わないことこそ“徳”であるとしている[10]。

「湯處於湯丘」自体は法家思想ではないが、以上の伝世文献と併せて考えるに、荀子や戦国後期の法家思想の形成に当たり、「湯處於湯丘」は大きな関連があるといえるのではないか。

・「伊尹九主」、黄老刑名思想との関連

整理者は、“敬天”、“尊君”、“利民”などの政治観から、「湯處於湯丘」は黄老刑名思想と関わりのあるものとしている。黄老刑名思想の代表とされる『黄帝四経』「前道」では、聖人が天地、鬼神、民衆の意向に従い事を起こし、自ら衆人の先頭に立ち、国家や民に利益を施す必要性が説かれている[11]。このような“天”や“民”に対する考え方は、「湯處於湯丘」の系譜の上にあるものであると見ることが出来る。

そして、法家や刑名思想との関連で想起させられるのが、『馬王堆漢墓帛書』に含まれる「伊

6 四部叢刊『孟子』巻九、「萬章問曰人有言伊尹以割烹･･･」。
7 『史記　一』、中華書局、「伊尹名阿衡･･･」。
8 四部叢刊『墨子』巻十二、「且主君亦嘗聞湯之説乎･･･」。
9 四部叢刊『荀子』巻八、「請問爲國曰聞脩身･･･」。
10 四部叢刊『管子』巻十五、「判斷五刑各當其名･･･」。
11 澤田、216-219 頁。

尹九主」である。「伊尹九主」は、伊尹と湯の問答が語られており、形式的にも「湯處於湯丘」と類似しており、注目されるべき文献であると言える。「伊尹九主」では、伊尹と協力して既に夏を伐った湯に対し、湯が「九主」、すなわち、九人の君主について説明し、君主のあるべき姿について論じている。この中では、刑名思想に基づく政治観が説かれており、齊木はこれを『呂氏春秋』に繋がるものであるとしている[12]。

・結論

以上の点により、「湯處於湯丘」は、戦国期、様々な思想的影響を受けながら、刑名思想、黄老刑名思想と発展していく中で、形成された文献である可能性が高いと考えられるのではないか。場面①②は、『墨子』や『孟子』等、戦国前中期に見える内容が描かれており、これらの故事の形成は比較的古いものと想像される。しかし、場面③は明らかに『荀子』等、後代の文献と思想的に共通する部分が多いことから、最終的にこの文献がまとめられたのは、戦国後期以降になると考えられる。黄老刑名思想に関する出土文献は圧倒的に少なく、その検討については、慎重であらねばならない。「湯處於湯丘」に見られるような政治観が、いかにして黄老刑名思想に繋がっていったか、その詳細について検討していくことを、今後の課題としたい。

・参考文献

清華大學出土文献研究與保護中心編　李學勤主編　『清華大學藏戰國竹簡（伍）』、中西書局、2015年。
齊木哲郎　『五行・九主・明君・徳聖』（馬王堆出土文献訳注叢書）、2007年。
澤田多喜男　『黄帝四経』、知泉書館、2006年。
散宜凌　「清華簡《湯處於湯丘》補說」、http://www.tsinghua.edu.cn/publish/cetrp/6842/20150413/80061428885614247.docx、2015年11月28日閲覧。
子居　「清华简《尹至》解析」（《学灯》第二十一期）、http://www.confucius2000.com/admin/list.asp?id=5146、2015年12月4日閲覧。
曹方向　「清華簡《湯處於唐丘》所見伊尹"割烹"故事初探」（中国出土文献研究会発表資料）、2015年7月5日。
曹方向　「清華簡《湯處于湯丘》補論一則」、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=2203、2015年11月28日閲覧。
馬文增　「清華簡《湯處于湯丘》新釋、注譯、析辯」、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=2234、2015年11月28日閲覧。
福田一也　「清華簡『湯處於唐丘』釈読」（中国出土文献研究会発表資料）、2015年7月5日。
『孟子』（大本原式精印　四部叢刊正編　二）、臺灣商務印書館。
『荀子』（大本原式精印　四部叢刊正編　十七）、臺灣商務印書館。
『管子』（大本原式精印　四部叢刊正編　十八）、臺灣商務印書館。
『墨子』（大本原式精印　四部叢刊正編　二十一）、臺灣商務印書館。
『呂氏春秋』（大本原式精印　四部叢刊正編　二十二）、臺灣商務印書館。
『史記　一』、中華書局、1959。

[12] 齊木、xxiii-xxiv。